

多様な学びで育った若者シンポジウム

梅 本：司会の梅本えりかです。本日はよろしく申し上げます。早稲田大学の文化構想学部の4年生です。あと、千葉県習志野にあるフリースクール「ネモ」というところで、少しスタッフもしております。

こんな大勢の前で話すのは初めてで、めちゃくちゃ緊張してるのでいろいろ進行に不手際もあるかなと思いますけれど、どうぞよろしくお願いいたします。

多様な学びの場で育った方々のシンポジウムをしようということで、お声をかけさせていただいたところ、いろんな年代の方に集まっていたいて、今回いろんな視点のお話しが聞けるんじゃないかなと思っております。

それでは、遠藤さんのほうから簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。

遠 藤：ご紹介いただきました、埼玉県から来ました、遠藤綾と申します。40歳です。若者のシンポということで「えっ、歳大丈夫？」と思ったんですけども。

在学期間というふうにいわれたんですが、小学校しか行ってません。幼稚園も行きました。

そのぐらいですね。中学校の一学期を終えて、夏休みを終えて、二学期から不登校っていう状態になりました。その後、学校には在籍せず。

※不登校になってからフリースクールりんごの木の前身である居場所に参加。学習塾がオーナーの厚意で週2回開放されていて、だいたい週1回のペースで参加していたとのことです。

今やっていることは「アレンジアロンゾ」って聞いたことある方いらっしゃいますか？今その会社員として働いてるんですけど、販売と、什器製作っていうんですけど、お店で使う品物を作ったりとか、あとはパネルを作ったりとか、そういったことをしています。

ラファエル：みなさん、こんにちは鈴木ラファエルと申します。栃木県真岡市から来ています。高校3年生、16歳でブラジル学校から来ております。どうぞよろしくお願いいたします。

日本に生まれたんですけど、8歳まで日本にいて、また6年間ブラジルにいたんです。そしてまた3年前の2014年に日本に戻ったんです。

日本に戻って一番困ったことが、やっぱり言語ですよね。日本語が難しくて、結構大変だったんですよ。まず日本に戻って、最初は1カ月間だけブラジル学校に行ったんです。そして日本の学校に入ったんですが、難しくてあきらめて、またブラジル学校に戻りました。

前 澤：前澤佳介と申します。今34歳です。学校は小学校一年生の途中から行かなくなって。行ったり行かなかったりという時期はあったんですけど、中学校からまったく行ってないです。

中学 2 年の時に、ホームシューレに入会して、25 歳ぐらいまで所属していました。25 歳のときに、生活クラブという生協に就職しまして、その後、その生協の関連の介護施設に移動になりまして、今、介護の仕事も 5 年ぐらいやっております。よろしくお願いします。

松 浦：みなさんこんにちは。松浦生と申します。年齢は 21 歳です。東京都の立川市にある東京賢治シュタイナー学校の 6 期生卒業生です。

在籍期間は、おそらく 2007 年だと思うんですけど、小学校 4 年生から高校 3 年生にあたる 12 年生までの 8 年間、東京賢治シュタイナー学校に通っておりました。

シュタイナー学校に入った経緯なんですけれども、母親がそのこの大学で教育関連の勉強をしていて、当時からシュタイナー教育を知っていたと。子どもが生まれたりシュタイナー学校に入れさせたいなという思いがあったみたいで、僕は小学校の頃から賢治の学校のほうに、体験入学とかで連れて行かれてたんですけど。当時は、たぶん家庭の金銭的な問題とかいろいろこみこみで、公立の小学校に行っていました。

公立の小学校もすごい楽しくて、友だちにも先生にも恵まれていたんですけど、授業が楽しいという感覚はあんまりなかったんですね。賢治の学校に体験授業とかで土曜日に連れて行かれるみたいな、休みの日なのになんで学校に行かなくちゃいけないんだと思ってたんですけど、実際、賢治の学校に行ってみたら、授業が楽しいっていう感覚がすごいあって。小学校 4 年生の時に、家を引っ越さなくちゃいけないタイミングで、「シュタイナー学校に行かない？」って親にいわれて、「あの学校ならまだいいか」みたいな感じで入ったのが経緯です。

その後は、やっぱり自分の性にすごいシュタイナー教育というものがあってたのと、基本的には感じていて、8 年間通った感じです。

現在は、鳥取県にある、公立鳥取環境大学っていう大学の 3 回生で、もうすぐ 4 年生になります。

本日は鳥取という遠いところからお招きいただいて、すごい恐縮なんですけど、その分出来る限りいろんなこととお話しできればいいなっていうふうに感じます。どうぞよろしくお願いします。

蓑 田：高校 1 年生の蓑田道と言います。小学校 2 年生まで地元の公立小学校に通っていました。

それで 3 年生から 6 年生まで、東京コミュニティスクールというオルタナティブスクールに通っていて、それで中学 1 年生から 3 年間、一般財団法人でやっている東京サドベリースクールという学校に通っていました。

今やっていることは、政治と地域活性とか、まちづくりに興味があって、そういった活動

や、大学受験の勉強などをしております。よろしくお願いします。

梅 本：みなさん、よろしくお願いします。さっそく雑な質問を、自己紹介をお願いしますみたいな感じで言ってしまってすいません。ありがとうございました。

では、続いて一人5分ぐらいずつ、少し深掘りした質問をさせていただきたいなと思います。

まず、遠藤さんからお願いします。遠藤さんは自分が好きなこと、趣味を仕事にしたというふうに、最初に私にお話ししてくださいました。なので、フリースペースの中で好きなことと出会ったりしたのかなと思って、好きなこととの出会いだったりとか、好きなことを続けていくうえで大変だったなというようなこととかを、お話しいただければなと思います。

遠 藤：まず好きなこととの出会いなんですけども、私は埼玉県越谷市にある、フリースクール「りんごの木」というところ、もっというとその前身であるフリースペースに通っていたんですけども、そこでお菓子作りが趣味な女の子たちに出会い、そこでお菓子作りをするようになったんですね。

規模が小さかったのもあってなかなかそこでは活動できなくなって、公民館を借りて調理室なんかでお菓子作りを始めたんですけどもそれでも物足りなくなって、技術が欲しくなったっていうんでしょうかね。

で、どうしたらいいかなって考えたら、製菓学校に行くですとか、いろいろ道はあったと思うんですが、私は学校にはとにかく行きたくなかったし、お金も欲しかったっていうのもあったので、突然ケーキ屋さん飛び込んだんですね。

そこら辺からでしょうか、好きなことと出会って、それを仕事にしたということになるんですけども…。

梅 本：社会通念的なものとしては、好きな事ばかりして仕事になるのか、みたいな感じの事を祝えたことはありましたか？ 私は今大学4年なので、去年一応就職活動をしてて、途中で辞めちゃったんですけど、そうしたら親と大揉めになりました。「好きな事ばかりしていて、いいわけないじゃないか」みたいな感じでいわれたんですけど、そういうのとどういふふうにやっていったのかなと思ったんですけど…。

遠 藤：私の場合は専門職なので、好きな事ばかりしかできなかったんですね。だから、あまり文句はいわれなかったし、親も「自分が決めたことなんだから、勝手にやって」っていうような両親だったので、今こっち見てますけど(笑)。

あんまりそこで苦しいことはなかったんですけども、ただ、学歴もなかったりしたので、社

会通念的というか、本当にそれだけで生きていけるのかっていわれたら、私は生きてこれたので大丈夫なんじゃないかなと思うんですけどね(笑)。

梅 本：ずっとケーキ作りをされてた感じなんですか？

遠 藤：一応、20歳から始めて、15年間務めたんですけど、腱鞘炎がひどくなっちゃって、どうしても続けられなくなってしまったので、職を変えて今に至るんですけども、一応好きなことを続けてはこれましたよ。

梅 本：いわゆる普通の学校に行っていないというようなことで、対等に渡り合っているのか、みたいなどころでは何か感じる部分がありますか？

遠 藤：製菓職人って、だいたい製菓学校に行くルートを辿ってくる人が多くて、私みたいにただお店に来てずっと見習いとして働いて、それから職人になるという方はほとんどいないので、その製菓学校から来た人たちからは、私は何も技術を持ってないって、まずは思われるんですよね。一緒に仕事をしていけば、「あっ、この人できるんだな」っていうのはだんだん分かってきてくれるんですけども、最初はそれが分からずだいたいじめられたこともありますし、その辺は分からないっていうので仕方がないのかなっていうのは、ありますよね。

梅 本：ありがとうございました。この後一人一人お話ししていただいて、この後シンポジストの方同士でご質問だったりとか、感想とかを言い合っただろうかなと思っておりますので、次はラファエルさん、よろしくお願いします。

ラファエルさんは、先程もおっしゃっていただいた通り、すごく国を跨ぐ流れの経験があるようでして。まず、一番気になるのが、お父さんがイランの国籍で、お母さんがブラジル国籍で、二人は日本で出会われたという、どういう経緯で日本にいらっしゃったんですかね？

ラファエル：お父さん、お母さんも、だいたい25年ぐらい前に日本に来たんですけど。いろんなことがあって突然出会ったって感じですかね。

梅 本：お仕事とかですか？

ラファエル：仕事の関係じゃなくて。なんかディスティニー、運命みたいな感じで。(会場笑)

梅 本：なるほど、それでラファエルさんが日本で生まれたと。

ラファエル：はい。そういうことです。

梅 本：日本で生まれて、一度ブラジルにも行ってらしたそうですが、それは何歳の時ですか？

ラファエル：8歳のときです。

梅 本：それは何か特別なきっかけとかあったんですか？

ラファエル：そうではなく。やっぱり日本に家族がいなくて寂しかったんですよね。

梅 本：8歳までは日本の学校に通われてたんですか？

ラファエル：いえ、行ってない。真岡にブラジル学校があったんですけど、ジュニアなので入れなかったんですよね。

梅 本：ブラジルに戻られて、その後6年間過ごされたんですね。そのときの期間はどんな生活をされてたんですか？

ラファエル：そうですね。日本とずいぶん生き方が違うんですよね。全部。

梅 本：特に学校とかはどういう感じでした？

ラファエル：僕が今日本で行ってる学校は、ブラジルの学校よりすごい小さいんですよ。ですからブラジルと比べたら、ブラジル学校でも結構違うんですよね。

梅 本：小さいというのは教室？学校のサイズですか？

ラファエル：全体で。

梅 本：全体的に。人数もブラジル学校だと1クラス10人未満ぐらいのクラスって言ってましたよね。

ラファエル：はい。

梅 本：4年前に日本に帰ってこられて、ブラジル学校エドゥカーレに入学されたそうですが。その時はどういう経緯でブラジル学校を知ったんですか？

ラファエル：日本に戻ったときに日本語が全然しゃべれなくて。そのオプションしかなかったっていうことですかね。

梅 本：なるほど。ブラジル学校の情報は来日してくる時に大使館などで知らせてもらえるとエドゥカーレの方に聞いているのですが、そんな感じで知っていたということで大丈夫でしょうか？

ラファエル：それは知らなかったです。日本に来て知り合い教えられました。

梅 本：ありがとうございます。日本に戻って、エデュカーレに入学して、だけど地元の教育委員会の指導でいったんは公立学校にも行かれたということで、このときの経緯を少しお聞きできたらと思うんですけども。

ラファエル：初めて日本の学校に行ったんですが、さっき言ったとおり、難しかったですよね。言語も文化も全然違うし、困りましたね。

梅 本：教育委員会はどんな感じで来たのでしょうか。もともとエデュカーレの生活がうまくいったところに教育委員会が入ってきてという感じですか？

ラファエル：あのとき僕はバスケの選手になりたかったのですが、ブラジル学校にバスケをする場がなかったんですよね。ですから、その中学校が「ここに来てバスケを一緒にしよう」って。

梅 本：なるほど。それで行ったら、言語とか文化の問題でうまくいかず、3カ月ぐらいで（ブラジル学校に）戻った。そのときは教育委員会のほうは何も言ってこなかった？

ラファエル：言ってこなかったですね。

梅 本：それで、ブラジル学校では今どういう勉強をされてるんですか？

ラファエル：高校3年生の次は、もうそろそろ高校は終わりなんじゃないですかね。

梅 本：あっ、そうですね。16歳で高校3年生ですよね？

ラファエル：はい。

梅 本：ブラジル学校の場合は12月に年度末がくるそうで、この一月に3年生になったそうです。日本の学校とは時期が違って、そうすると、大学受験の問題が出てくるんですかね？

ラファエル：そうですね。

梅 本：卒業した後は何か考えておられることはありますか？

ラファエル：もちろん大学に入りたいんですけど、18歳にならないと困りますよね。ですから、18歳になるまでいっぱい勉強したいなと思います。大学目掛けて自分でね。

梅 本：ラファエルさん、ありがとうございました。

では、そのまま前澤さんにお聞きしたいと思います。前澤さんは、ホームエデュケーションということで、他のシンポジストの方の学校に通うスタイルとは違って、家で勉強すると

というような環境だと思うので、一番コミュニティ的なものが薄いのかなと思ひまして。私として一番聞きたいなと思ったのが、学校の問題でよく社会性が身に付く、身に付かないかみたいな話がよくされるような気がするので、その辺についてお聞きしたいなと。

前 澤：そうですね、基本的にずっと家にいるので、僕の場合は社会というか、家の外とのつながりってというのが、ホームシュールから毎月送られてくる冊子（機関誌）を読んだり、それにお便りを送ったりして他の会員の人たちと交流したりとか。

あとは、合宿というのもあって。年に1回とか、北は北海道から、南は沖縄まで会員がいて、全国から集まって交流する機会もあったんですけど。そういう中で、家の外とのつながりを持っていたという感じです。

社会性がどうかっていうのは、僕の場合でしか語れないんですけど、あんまり関係ないかなっていう。そんなに僕も人付き合いが上手なほうではないですし、就職するまで普通のアルバイトとかもしたことなかったんで、すごい最初は不安だったんですけど、働き始めたらその中で教わることとか、今思うと(当時は)常識がなかったなと思う事もあったりするんですけど、それはそれでいろいろ周りの人とか、先輩とかがいろいろ教えてくれたりするんで、別に学校で社会性を身に付けなくても、どうとでもなるんじゃないかなというのが僕の感じなんで。

梅 本：ありがとうございました。そもそもホームエデュケーションというのが、私は通信教育のようなイメージを持っていて。学校であるような、国語とか数学とか、そういう科目の教材が送られてきて、自分でやるものなのかなと思ってたんですけど、前澤さんの話を聞くと、どうもそうじゃないっぽいんですよね。どんな感じだったかちょっと…。

前 澤：僕も最初はホームシュールに入ったときに、親から「こういうのあるよ」っていわれて入りました。ホームシュールにもそういう通信教育とか、一般の学校で学ぶような学びの教材とかもあって、親に「やってみない？」みたいなふうにいわれて、「じゃあ、ちょっと国語と算数と…」みたいな感じでやってみようかな、みたいな感じで最初は申し込んだんですけど。そしたら、スタッフの方が「息子さんは、本当はそういうことやりたいんじゃないんじゃない？」って、「やりたくないのにやっても、あんま意味ないと思いますよ」って逆にスタッフの人にいわれて、「じゃあ、いいです」みたいな感じで、本当にホームシュールでは、僕はそういういわゆる勉強みたいなことは全然やらなくて。本当にやりたい人がやるという感じです。

それよりも、ホームエデュケーションというのは、家にいて自分の好きな事とか、やりたいことをのびのびとやって、自分の才能とか、そういうのを伸ばしていけばいいんじゃない

かなってという考え方がホームエデュケーションなのかなというふうに僕は思っています。

梅 本：いつからホームエデュケーションになったんですか？

前 澤：僕は中学2年です。

梅 本：じゃあ、一応基本的なことというか、小学校で習うようなことはあらかじめ身につけていたんですかね…。ホームシューレっていうのは、教科学習をやってもやらなくてもいいという感じだったので、それを小学校からやってると基本的なことが身に付かないんじゃないかと思っちゃったりもするんですけど、そういうのはどうなんですか？

前 澤：僕、小学校もほとんど行ってなかったんで(笑)。なんていうか、例えば、漢字の読み方とか、マンガを読んだりとかすれば覚えるし、書き方、漢字も最初は全然書けなくて、それも例えばホームシューレの機関誌にお便りを送ったりするときに、漢字を調べて送ったりとか、そんな感じで自分なりに調べながらやったりなんかして、なので読み書きなんかもおかげさまで何不自由なく生活できるようにはなったので、必要なら人間って自分で身につけるものかなっていうふうに思っています。

梅 本：学校に行かなきゃ身に付かないものでもないってことですよね。ありがとうございます。あと、いろんな学校以外の場所っていうのがある中で、どうしてホームエデュケーションを選ばれたのかっていうことを。

前 澤：単純に学校に行きたくなくて。フリースクールの東京シューレとかも親が見学に行ったりとかしてたんですけども、僕、千葉県木更津市なので、東京シューレに通うのも東京に通うのも、自分でもあんまりイメージが湧かなくて。近所にフリースペースみたいなのはあって、そこに行ったりもしてたんですけど、あんまり他の場所に通うってことにはあんまり関心がなかった。親がたまたまホームシューレを紹介してくれたので、その流れでホームエデュケーションっていう感じになったという感じですかね。あんまり自分で選んだっていう気持ちもないんです。あんまり選択肢もなかった。もしかしたら、東京シューレの近くに住んでたら、東京シューレに通ってたかもしれないですね。

梅 本：こういうシンポジウム、私も何度か聴く側として参加していて思うのは、だいたいこういう選ぶのって、理由じゃなくてきっかけだなと思うので、そういう感じなんですかね。もっと知っていれば違ってたかもしれないけど、そのときはそういう感じだったんですね。前澤さん、ありがとうございました。

じゃあ、そのあとの松浦さんをお願いしたいと思います。松浦さんにはシュタイナー教育で身についたと思う力についてお聞きします。シュタイナー教育は普通の学校とは違う理念のもとでやっていて、授業とかもちょっと違うということをお聞きしていますので。

松 浦：「シュタイナー教育ってどんなことやってるの？」ってよく聞かれます。なかなか説明しだすと長くなっちゃうんですが、僕が一番端的に分かりやすいなと思って、いつも聞かれたときにお伝えしてるのは、数学の授業とか、普通の学校という表現がどうか分かんないですけど、普通だったら、「この問題はこの公式を使って解いてください」っていわれて、やってみて「ああ、こうだな」ってなる、そういう教え方かなと思うんですけど。シュタイナー教育では、公式は教えてくれないんですね、例えば図形とかを切り貼るとかしながら、自分たちで公式を見つけ出すところから始めていく。そういう感じの教育。といってもいまいちピンと来ないかもしれないんですけど（会場笑）、そうやってお伝えしています。

あとは僕がすごい印象に残ってるのは歴史の授業で、授業の頭に先生に「みなさんにとって歴史とはなんですか？」って聞かれるんですよ。で、近くの席の子と「僕らにとって歴史ってなんだろう」って話して45分の授業が終わるみたいな。歴史っていうのは、何年になにが起こって、何が起こりましたっていう教え方じゃなくて、その歴史の本質みたいなところをそれぞれ自分で考える。そういう教育だなんてふうに思っています。

僕はシュタイナー学校を卒業して、卒業というか、12年生ですね、高3のときに、だいたいシュタイナー学校を卒業して、大学に行きたいって考える人は、賢治の学校の場合は、12年のカリキュラムを終えて、1年間基本的には受験対策というか、受験の1年を経て大学に行くというのが基本的なんですけれども。僕が行きたかった学校が鳥取にあって、いわゆる偏差値的にはそんなにたいしたところじゃなかったけれども、ここに絶対行きたいなと、ここに行かないと後悔するなっていうふうに思ってたので、学力的にちょっと勉強すれば現役で受かるなと思ったので、現役で受けました。

よく受験なかなか苦労するっていうこともいわれるし、結構在校生たちは今不安に思ってる部分もあるなっていうふうに思いますけれど、それはある側面そうだなっていうふうには思います。でも、何年に何があったとか、ここの用語を答えなさいみたいな問題は、そんなのは調べればいいじゃんって思っちゃうんですね。

それより、そのメカニズムはどうなってるかっていうことを知りたいのに、別にそこはどうでもいい問題しかでないっていう、そこはなんか違和感はありますけれど。ただ、大学に入ったあとは、やっぱりシュタイナー学校で身についた本質を捉える力みたいなのが、すごい役立ってるっていうか、力になっているなと思っていて。表面的に捉えないっていうか、自分の中で納得いくまで考え続けるみたいな力、基礎的な部分が高校までに付いて

いたからこそ今大学でそれなりに楽しく学べていると思います。

梅 本：ありがとうございます。シュタイナー教育面白いですね。あと、オイリュトミーについても少しお話しいただきたいのですが。

松 浦：オイリュトミーっていう謎のダンス的な、まあ、音楽とか詩を体で表現するみたいな、僕も説明ができない。

梅 本：ぜひ、調べてみてください。私なんかは公立の小・中・高でずっときたので、国語、算数、理科、社会みたいなのが科目って考えてたんですけども。シュタイナー教育を見に行かせてもらったら、全然科目が違うんですよ。オイリュトミーもひとつの科目なんですよ？

松 浦：科目ですね。週3ぐらいの科目です。

梅 本：それから、本質を見抜く力などを強調するシュタイナー教育の中で、自分が内部にいたからこそ感じたことがあったというふうにおっしゃられていたので、そのことについてお話しただければ。

松 浦：僕が卒業したあと特に「子どもができればシュタイナー学校に通わせたいの？」って聞かれることがあるんですね。「どうかなあ？」と思って。というのは、シュタイナー学校基本的に僕の性にはあっていたし、すごい楽しい学校でした。

ただ、後になって、大学生になってからときどき感じることに、この間も梅本さんとお話ししていて、「教育ってそもそも守られたものだよね」というような話になったので、そこはなんとも言えない部分はあるんですけど、ものすごく守られた環境だったなっていうふうに思うんですね。

基本的に小中高一貫なんですが、学年が上がって高等部とかになると、特に最後の学年とか卒業論文、全然アカデミックな論文じゃないんですけど、卒業するときの考えをまとめる卒業論文があったりとか、卒業劇みたいなカリキュラムがあって。それをやると、とりあえず何をやっても「ああ、すごかったね」とめっちゃくちゃ褒められるんですよ。「うん。これは褒められすぎじゃないか」と、「自分そんなに頑張ったっけ？」って。僕はわりとまじめだったので、頑張った自信はそのときはあったんですけど、今となっては、もっとできたはずなのに、すごい褒められて、そこで自分の中で納得しちゃってたみたいな。本当はもうちょいできたかもしれないのに、納得しちゃってたなあっていうのは、少し感じている部分ではあります。

梅 本：ありがとうございます。自分は褒められすぎじゃないか、みたいなことを感じて、そういう

ところを「守られた環境」と感じたということですよ。

「このままでいいの？」、「こういう感じで褒められてれもいいの？」みたいな、そういうところに疑問を持つ感情って、他の同級生というか、同じクラスの仲間同士で共有してたりしたのかなってというのは気になったんですけど、どうですか？

松 浦：僕は6期生なんですけど、1期生、2期生辺りって、すごいパイオニアな世代で。学校を自分たちで作ってきた世代で、「社会なんて怖くないぞ」って、「自分たちは何でもできるんじゃない？」みたいな、これはあくまで僕の主観で、先輩を見てたから、そう思っただけかもしれないんですけど、そういう部分があって。

僕の世代とか、4期生ぐらいか、「えっ、自分たち変な学校に行ってるんじゃない？」って（会場笑）、「自分たち普通と違うよね？」、「この後社会に出て大丈夫なのかな？」みたいな不安感はずいぶん漠然と世代としてはあったのかなと。その世代を自分たちで共有したりとか、先生にぶつけることもしょっちゅうしていました。先生との距離はものすごく近いし、ぶつければ、まあ、理不尽に跳ね返されることもあるんですけど（会場笑）、基本的には受け止めてくれていたので。友だち同士でそういう話はしてたかなというふうに思います。

梅 本：ぶつかったで思い出したんですけど、サッカーの話が面白かったので…。

松 浦：小学校4年生まで公立の学校に行っていて、僕はわりと人見知りだし、あんまり友だちの輪に入るといよりは、数少ない友だちとおとなしく遊んでいたのが幼稚園ぐらいで。小学校も最初はそういう感じだったんですけど、サッカーに出会って、サッカークラブに入って、そこでの友だちとかが一気に増えて、すごいサッカーが大好きだったんですね。小学生なのでサッカー選手になりたいなんて夢を持っていたんですけど、小4のときに、シュタイナー学校に転校したら、サッカー部とかないんですね。サッカークラブもないし。さらに先生にいわれたのが、「サッカーはやめてください」と。「何ですか？」と、まあ、4年生のときは多分「何ですか？」と聞かなかったんですけど、当時はサッカーは基本禁止みたいな風潮があって。今はそこまではないんですけど、当時はですね。7年生か8年生なんで、中1、中2ぐらいのときに、きっかけは忘れたんですけど、先生にまた「サッカーはダメだ」と、「サッカーをあんまり見ちゃダメだ」といわれたんで、「えっ、何ですか？」って結構バツたんですね。そしたら、サッカーは丸い物を蹴るわけじゃないですか、丸い物って人間の頭の象徴だと、「人間の頭を蹴るとは何事か」と。シュタイナーさんがどこまでそれを言ってるのか分かんないですけど、シュタイナーさんがそういう感じのことを言ってたというのはあるみたいですね。

で、そのときの先生にいわれたのが、「結局サッカーの歴史の中で、アフリカとかが植民地

だった時代に、植民地支配をしていた側の国の人たちが、アフリカ人の方々の頭蓋骨を使って、サッカーをしていたみたいな歴史が実際にはある。そういう経緯があるから、丸い物は蹴らないでね、ということだよ」っていわれて、「いやいや、その歴史は分かったけど、それとスポーツのサッカーを一緒にして禁止はないでしょ」っていうバトルをしたという話です。(会場笑)

梅 本 : ありがとうございます。さっきの授業の話もそうですけど、歴史とか算数とか、本質は何かっていうのを見極めていって、考えていくっていうのまた別の側面なのかなと、聞いて面白かったのでお話しいただきました。ありがとうございました。

この後は、蓑田さんをお願いしたいと思います。蓑田さんは今の立場が面白いというか、特殊ですよ。一応高校生っていわれていたんですけど。

蓑 田 : 高校生なんですけど、今学校に行っていないんですよ。サドベリーにも行ってないので。去年の7月に高卒認定を取って、今はやりたいことをやっています。

もともとは小学校2年生まで普通の公立の学校に行っていて。すごく楽しかったし……まあ、楽しかったってほどでもないんだけど、そこそこみんなに合わせてみたいみたいな感じでした。でも、ある日先生が黒板に書いてそれを写せみたいにいわれて、すごくつまんなかったですよ。授業がすごくつまらなくなってきた。そんなときに雑誌で面白い学校があるって親が紹介してくれて、それで体験に行ってみたんです。

そしたらすごく面白くて。それで小学校3年生のときに東京コミュニティスクールっていう、オルタナティブスクールに転校しました。今までの公立の学校と、東京コミュニティスクールが大きく違うなと思ったところは、一人一人を本当に見てくれるし、一般の学校だったらいろいろな個性っていうのは、やっぱり均一化しちゃうっていう側面があるなって感じて。だけど、その一人一人が変わってるっていうところを、すごく大切にしてくれたし、そういうところがすごくよかったなって思っています。

それで、小学校は東京コミュニティスクールというところに通って、そこは小学校だけなので、中学校を探していて。最初は都立の中高一貫校の受験を考えていて、塾とかも行ってたんですよ。そのとき、ある中高一貫校の説明会みたいなものに行って、いろいろな説明をしてたんだけど、一番強調されているところがすごくあって、「今年は〇〇人大学に何人入りました」って。

もちろん、それもいいことだとは思っただけど、そればかり言ってたんですよ。それしか魅力がないのかなと思って、それで受験するのやめようと。それでいろいろと探して、雑誌で授業がない学校があるというのを読んで「えっ、授業がないってどういうことだ？」とい

うふうに思って、それが東京サドベリースクールでした。

東京サドベリーに体験に行き、本当に自由で、授業もカリキュラムもテストもない。先生もいない。そんな中で全部自分でやっていくという状況が、すごく自分にとってやりたいこともあったし、体験に行ってみて、ここにすぐ決めました。

でも、自由だ、自由だと言ってたんだけど、本当はゲームをするために入ったんですよ。遊べるし、自由にできるっていうのは表向きで、小学校は良い学校だっていったけど、すごく忙しかったから、それから解放されるために、僕はゲームがやりたかったから、正直いって。

最初の3カ月ぐらいは、自分はちょっとプライドが高いところがあったから、「勉強もできるし」みたいに思ってたんだけど、学校に行っているうちに、気が付いたら昼休憩の1時間だけ学校の中でゲームをやろう、「昼休憩ぐらいゲームをやってもいいでしょう」って言って、さらに気が付いたら一日中昼休憩みたいな感じになっちゃって(笑)。朝から夜までゲームみたいな感じになっちゃったんですよ。一年ぐらい廃人みたいな感じで、もうゲーム漬けみたいな感じだったんですよ。(会場笑)

中学2年生の夏に親に廃人宣言をしたんですよ。「僕は廃人になります」と。そのときゲームを中途半端にやるんじゃなくて、朝から夜まで本当にゲームだけの人生をやれば、何か見えてくるものがあるんじゃないか。(会場笑) そう思ってゲーム廃人に1カ月ぐらいなっ

て。そしたら、それだけじゃないんだけど、そのとき一応塾には通っていて、個別指導の塾に。変わった塾で、中上健次の本を塾の先生に薦められたんですよ。「岬」って本で。その本を読んで、中上健次が被差別部落の出身で、三重県の熊野の被差別部落の話っていうのを読んだときに、社会問題というか、すごいカルチャーショックを受けて、そこからすごく社会の問題に興味を持ったんですよ。

それで、政治とかにも興味を持ち始めて、そのとき2015年の夏で、ちょうど安保法制か、反対か賛成かみたいな感じでした。すごい議論がされていたときで。ニュースでいろいろやっていて、高校生が政治のことについてやっている高校生の団体をテレビでたまたま観て、ちょっと面白そうだなとあって、その高校生の勉強会に行ってみたんです。それをきっかけに、高校生の政治の団体に入って、1年間ぐらい「ティーンズソウル」というところで活動していました。それで、その活動が終わったのが中学3年生の夏ぐらいで。どうしようかなと思って、これから何しようかって考えたときに、高卒認定の受験をしよう。

やっぱり政治とかまちづくりに興味があって、それをやるためにはやっぱり大学に入らなきゃいけないなと思って、それで高卒認定の受験勉強を始めて、去年の夏、高卒認定を取っ

たって感じですよ。

梅 本：中学校を出たのはいつ？

蓑 田：卒業って形ではないんだけど、サドベリーを出たのが去年の4月です。

梅 本：去年の4月で、7月にもう高卒認定を取ったんですね。そうすると、プロフィールのほうには高校1年生と書いていますが、別に高校に所属してるわけじゃないんですね。

蓑 田：そうですね。今は行ってないですね。なんかもう学校に行かなくてもいいんじゃないかなっていうふうに思っちゃって。(会場笑) 別にサドベリーにも行かなくてもいいんじゃないかなっていうふうに思って、もちろん、サドベリーに行った中で、ゲームとかをやっていて、自分についてすごく悩んだんですよ。

そこで考えたこととかってというのはすごく(今の自分に)活かされているということを感じるんだけど、今はもう行かなくても別にいいんじゃないかなと思ってるんで、やりたいことがあるし、今は行ってないって感じですね。

梅 本：じゃあ、今は学校とかには行かずに、社会問題とかそういう活動とかをされてるという感じですかね？

蓑 田：今はまちづくりに関心があって、高校生の団体で活動をやってるんですけど、例えば地域活性について高校に行って授業をやってというようなことを企画しています。

梅 本：蓑田さん今は16歳で、高卒認定も取っていて、大学には行きたいとお話ししていましたが、大学は18歳からなので…。

蓑 田：2年間余っちゃって(笑)。

梅 本：浪人じゃないけど浪人みたいな感じですよ。

蓑 田：だから自由に時間が使えるので、勉強やったりとか、自分のやりたい活動をやっていきたいなと思っています。

梅 本：ありがとうございます。じゃあ、一通り話していただいた感じで、話したりない部分も私のほうもたくさんあるんですけども、シンポジストの方から、何か感想だったりとか、疑問点とかがあれば言っていただければと思います。遠藤さんからどうぞ。

遠 藤：うーん…(笑)。

梅 本：ありがとうございます。ラファエルさんは何かありますか？

ラファエル：学校に行かないと時間があること、時間を無駄にするのはダメですから、蓑田さんにどうやってその時間を使うのか教えてもらえますか？

蓑 田：そうですね、まあ、なんだろうな…。僕は結構忙しくて。何で忙しいんだろう(笑)。勉強やったり、なんか好きなので、勉強をやっているっていうとか、大学受験に向けた勉強っていうのをやっていたり、文章を書いたり、あと政治のこととかでちょっと関わっていることがあって、そういう勉強会、一般社団法人「ReDEMOS」っていうところの勉強会で、シンクタンクなんですけど、最近の中高生や大学生って政治に関心がない人が多いから、そういう人たちが集まって政治について考える場所を作ろうみたいなことを、去年はやっていました。そんなことやっていたら時間がなくなっちゃって(笑)。

梅 本：じゃあ、学校行かなくても結構忙しいんですね。大丈夫ですか、ラファエルさん？

ラファエル：大丈夫です。

梅本：ありがとうございます。前澤さん何かありますか？

前 澤：じゃあ、ラファエルさんに。公立の中学校に3カ月行ったんですよね？

ラファエル：はい。

前 澤：そのときはどんな印象でした？

ラファエル：周りの人にあんまり喋れなくて、結構一人ぼっちだったんですよね。それと感じたのは、日本社会って孤独っていう感じじゃないですかね。あんまり他の人と話をしないし、そういう感じは結構しましたね。学校の中だけではなく、それが辛かったんですよね。

前 澤：エデュカーレに戻って、少し楽しく過ごせるようになりましたか？

ラファエル：そうですね。もう3年間日本語を勉強してますから。ブラジル学校のみんなとも仲良くしてますから、本当楽ですよ。

前 澤：友だちができたっていうのが大きかったですか？ 中学校では友だちができなかったですか？

ラファエル：そうですね。あんまりできなかったんですね。

梅 本：ありがとうございます。

前澤さんに私も一個聞きたいんですけども、ホームエデュケーションでも出かけたりはするんでしょうけど、基本的には家にいらっしゃって、何をきっかけに働きに出ようとなっ

たのかなと。

前 澤：やっぱ 20 代以上、23、24 となってくるにつれて、単純にそろそろ自活しないとまずいかなみたいなの(笑)。親はそんなに働けとかいわなかったんですけど、自分なりに親にいつまでも迷惑をかけてられないなというような気持ちになんとか、焦りみたいなのもあって。それで、ホームシュールとか、東京シュールさんとかいろんなところでボランティアとか、仕事体験みたいな、あと合宿のお手伝いとか、いろんな体験をさせてもらって。なんか仕事をするのも楽しそうかなっていう気持ちにだんだんってきたので、それでそろそろ働こうかなみたいなことを、スタッフの方に相談して、そしたらいろいろ相談にも乗ってもらって就職したっていう…。

梅 本：生協でしたっけ？

前 澤：最初はそうです。

梅 本：今は介護のお仕事ですよね？

前 澤：最初どんな仕事がいいかなっていうふうに考えて相談していたときに、当時のスタッフの方から、「これからは食とか農業とか、そういうのが大事になる時代だから、生協とかいいんじゃない？」っていうふうにいわれて。

そのスタッフが、「生活クラブ」っていう生協をやっていて。うちもたまたま親が「生活クラブ」でやってたので、なんか馴染みもあるし、じゃあちょっと受けてみようかなって受けてみたら、運よく入れちゃったんで、そういう感じですね。

梅 本：ありがとうございます。松浦さんは何かありますか？

松 浦：僕自身もシュタイナー学校に 8 年通っていて。公教育に対する疑問みたいなものが漠然とあったんですけど。あったからと言って、シュタイナー教育以外の一条校以外の教育というものをあんまりちゃんと学んだことがなかったので、みなさんのお話しはすごい面白かったなというふうに思いました。

僕、今自分が何をやっているか、あんまりちゃんとお話ししなかったなと思って。鳥取で大学生やっていて、植物生態学の研究をしながら人口 3500 人ぐらいの町で民泊をやってまして。鳥取って人口最少県なんですよ。課題先進地っていわれて、過疎が進み、高齢化が進んでいる町なんですけれど、そこの更に人口がめっちゃ少ない町に、東京とか大阪とか都心部から同世代を呼んできて、いろいろ自分のやってみたいことを田舎でならチャレンジできるよ。という提案をさせてもらおうというようなことを、大学に通いながらやってい

ます。

全然まだビジネスとして成り立ってないのが正直なところなんですけど、あと一年で成り立たせたいなというところで、今そこにも取り組んでいるという感じです。

なんでそのお話をしたかという、僕、大学はすごい希望を持って入ったんですよね。入ったら、偏差値という言葉はあんまり使いたくないんですけど、一般的な偏差値的には全然たいしたところではなく、だけれども公立なので、妙に滑り止めで受けてくる人がたくさんいるんですね。入って、入学式の翌日とかに、隣近所の人たちに「お前センター失敗したんだろ？」っていわれて、「いや、僕ここに来たくてきたので」という、その違和感が最初にあって（会場笑）。

大学一年生のときは、授業も教授が眠そうな目をしながら喋って、なんか一方的に受けるだけみたい。シュタイナー学校の場合は本当に自分から発言したり、周りといろんな議論をしながら授業を受けていたので「えっ、大学ってこんな感じなのかな?」「授業が面白くないな」と思っていた時期があったんですね。

シュタイナー学校の卒業生でわりとその傾向があるんですよね。大学に行って、大学に行ったら授業面白くなかったとか、周りともあまり議論できなかったみたいな話は僕の先輩とかにもちらほら聞くんですけど、他の学校でそういう選択をされた方がどうなのかなっていうことを、ちょっとお聞きしたいなと思ったんです。分かる範囲でというか、そんなに周りの人がどうっていうところを分かるのかな？

梅 本：遠藤さんはどうですか？ 学校には行きたくないっていわれてましたよね？ 何か理由とかあったんですか？

遠 藤：多分ね、眠くなっちゃうんですよ。つまらないなと思うんですよ。小学校は一応行ってたんですけど。授業自体は面白くって、教科書を学期の始めにもらうじゃないですか、それを全部その日に読んじゃうんですね。で、それは面白かったなと。

ただ、読んじゃうと、授業受ける頃は「もう私知ってるからもういいよ」という、そういう状態になるんですよね。だから、「もういいです」と。だからあんまり必要がなかったっていう感じでしょうかね。

梅 本：ありがとうございます。蓑田さんはどうですか？ 結構行き来されてますよね？

蓑 田：行き来っていうと？

梅 本：公立の学校も行って、あとはオルタナティブスクール…。

蓑 田：基本的には公立の学校は2年生までなので、それからほとんど自由になっていくみたい

な。まだ分かんないんですけど、大学に入ってないので。

たしかに大学に入ってからどうなんだろう…。ちょっとそれがあつたりもするのかななんていうことは思ったりもして…。

梅 本：前にお話ししていて、大学の授業があんまり面白くないのが伝わっちゃいましたかね(笑)。早稲田だと一応偏差値的には上のほうだということで、結構がっかりされて「ほかに何がいいの？」って話になりましたよね。ありがとうございます。

松 浦：結局、僕が行き当たったのって、一個は、別に大学の勉強って机の上だけの勉強じゃないし、先生たちは直接お話しすればすごく面白い方はたくさんいるなと思って。学びって結局自分でやらないと、環境もあるけれども、結局は自分でやるかやらないかってことかなっていうふうに思っていて。

あと、自分自身は実践フィールドを見つけたので、どちらかというとその実践を経由して学べればいいかなというふうに思っただけ。そういう気持ちで大学の授業を受けていたら、結構面白くなってる今は思っています。

梅 本：ありがとうございます。じゃあ次、蓑田さん何かありますか？

蓑 田：じゃあ、前澤さんに。ホームエデュケーションですよ？

前 澤：はい。

蓑 田：僕もどんなことをずっと…25歳までやられてきたのかなというのにすごい興味があって。

前 澤：最初の頃はほとんど送られてくる機関誌を読むだけで、本当に家でゲームやってただけなんですけど、それが18ぐらいまでそんな感じでしたかね。

18のときに車の免許を取りたいと思って、車の免許を取らせてもらって。その後は、やっぱり外に出たいというか、家の中にいるのも飽きてきたというか、そういうのもあってホームシューレの合宿に行ったりとか、積極的に関わるようになって。21、22かな、ホームシューレの会員って立場だったんですけど、アルバイト兼ボランティアみたいな感じでホームシューレの仕事をちょっと手伝ってみたい？みたいな感じで誘われて。機関誌の編集の補助とか、送られてくるお便りにコメントを書いたりとか、編集のお手伝いをするようになって。そんなことをやったり、そしたらいろいろ東京シューレのフリースクールのほうの関係のボランティアとかにいろいろ声を掛けていただいて。とりあえずいろんなことを体験してみたいっていう時期だったのでいろいろと体験させてもらってっていう。

基本家にいて、ちょこちょこボランティアとか、そういうのにたまに出ていくみたいな、そ

んな生活でしたね。

蓑 田：それで生協に入る？

前 澤：そうですね。

蓑 田：ありがとうございます。あと少しだけ質問というか、さっき松浦さんがシュタイナーですごく褒められるみたいなことを言っていたじゃないですか。それをすごく僕も感じて、やっぱり人数が少ないし、すごく高く評価してくれるっていうのがあったし、「こういうことやってます」っていうと、周りの人から「すごいですね」とか「変わってるんですね」とかいわれて、それにすごく違和感を感じるものがあって。普通の教育の一つでしかないっていうふうに思っていて、サドベリーも東京コミュニティスクールも…。

梅 本：「すごいですね」っていうのは周りの人にいわれるんですか？

蓑 田：内部の人からもそうですし、外部の人にも「そんなすごい変わったことやってる」みたいなふうにいわれる。そういうことには僕もちょっと疑問を感じる。

梅 本：サドベリーってすごく民主的な学校っていわれて。この間お話を聞きに行ってみてびっくりしたんですけど、新しい生徒が入学するかどうかとかも、全部その生徒たちが話し合っ決めてるんですよね？

蓑 田：投票で決めるみたいな感じで、生徒全員が承認しないかぎりはいれない。

梅 本：スタッフのお給料とか、水道料金とかも全部貼ってありましたよね。それぐらい民主的で、生徒もスタッフも同じように運営に関わるっていうか。

蓑 田：それもそうだし、遊んでもいいし、それも自由だし、ゲームを一日やっても自由だし、それも含めて全部自分で決めていく学校です。

梅 本：そういう学校ですごい民主的で、すごいいわれるけど…。

蓑 田：一つの考え方だし、サドベリーが合ってる人も合っていない人もいると思うんですよ。

梅 本：外の人に「そういうすごい学校で学んでいるのか」と言われるとおっしゃっていましたね。

蓑 田：例えばサドベリーに向いてない人もいるなというふう感じて。逆に公立の学校に合ってる人もいるなって感じる。そういう意味でサドベリーに合ってる人はサドベリーに行けばいいし、公立の学校に行きたい人は公立の学校に行けばいいっていうふうで、すごく感じていて。そういう意味で、本当に多様な教育っていうのを選べるような社会になっていけ

ばいいなっていうふうに思っています。

梅 本：ありがとうございます。もう少しあるんですけど、ラファエルさんに、公立学校で辛い思いをされたとお話しされてたと思うんですけど、どうだったらもう少しマシだったんじゃないかなって思うことってなにかありますか？

ラファエル：入ったときには、先生たちも助けるから心配しないでっていわれたんですけど、そんなことはあんまりなかったですよ。それが残念です。

梅 本：もう少し助けてほしかったなということですか？

ラファエル：そうですね。僕あのときは13歳だったから、結構若かったから。

梅 本：言葉の問題とかで結構大変だったって感じなんですね。

ラファエル：パラレルの世界で生きてた感じがします。

梅 本：ありがとうございます、助けるというのも口だけだったんですね。残り10分になってしまったので、最後に一言ずつというか、こんな雑な司会で申し訳ないですけど、何か話したりないことがあれば、遠藤さんから順番に最後に一言お話しいただければと思います。

遠 藤：そうですね…。何でもよければ…売上げを伸ばしたい。前年割れしています。それぐらいですかね。

梅 本：ありがとうございます。ラファエルさんも何か、卒業後どういう勉強をしたいとか、これからどうしたいとか何かありますか？

ラファエル：日本語で出来るか分からないんですけど、国際的な、哲学的なことがしたくて、いろんなインフォメーションをまだ探してるんです。

梅 本：哲学ですか。

ラファエル：それと、一言、言いたかったことがあるんですけど、ちょっと話していいですかね？

梅 本：大丈夫ですよ。話してください。

ラファエル：僕が感じたのは、自信がなかったんですよ。僕のパーソルが。その自信がないのは僕だけじゃないと思うんですけど、学校以外にエデュケーション・プログラムがあったらすごく助かると思ったんですけど。

例えば学校の外で、外国人でも日本人でも好きなことを一緒にする。そういう場があったら

すごく助かると思うんですね。

梅 本：自信がなかったというのは、ラファエルさんとか周りの方、エデュカーレに行ってる人も？

ラファエル：そうですね。ですから、みんなが力を集めたらいける感じがしますよね。力というか、自信に。

梅 本：ああ、自信をつけたり。じゃあ、その環境のせいで自信を無くしちゃって、もっと自信の持てる環境だったら、もっといろんなことができるんだって話ですよね？

ラファエル：そういうことです。

梅 本：ありがとうございます。それじゃあ次、前澤さんお願いしてもいいですか？

前 澤：学校に行かないで家メインで過ごしてきたんですけど、ようするに僕が言いたいことって何なのかなって考えて。やっぱり他の人もそうだと思うんですけど、やりたいことを自分で見つければ、別に学校というところにこだわらなくてもいいのかなと、今働いていて思います。

学歴は中卒なんですけど、今のところそれであんまり困ったことないので。生協の仕事も、今の介護の仕事も、仕事をしながら必要な知識とかも覚えられるし。

例えば学校に行きたくても行けなくて悩んでる人もいると思うんですけど、あんまり心配しないで、なんとかなるよというふうに言いたいですかね。そんな感じです。

梅 本：ありがとうございます。松浦さん。

松 浦：僕は学校教育って教育の一部でしかないなっていうのをすごい思っていて。これは僕の個人的な意見なんですけど、教育って大きく「家庭での教育」と「学校での教育」とあと「地域での教育」みたいなものがあるかなと思って。東京にいた頃はあんまりそれは感じられなかったんですけど、鳥取ではその比率がすごい今も残ってるんですね。そう考えると、純粹に三等分だとしたら、学校教育ってたかが三分の一でしかなくてっていうことを常に思っています。

今後の抱負的なところにも関わってくるんですけど、自分も教育ってところは興味がありつつも、自分が教える教育は、自分みたいなちっぽけな人間にはできないなっていうか、おこがましいなと思って。でも、一緒に成長していく教育ならできるかなっていうふうに思っています。今鳥取で地元の高校生たちと、地域のいろんな人に取材して一緒にツアーを作りたいな、教育プログラムを実践していたりとかして。学校外の地域の人から教わる教育プログラムみたいなのを作っています。その中で、自分も高校生たちとたいして年齢も

変わらない彼らと、一緒に成長していきたいなっていうことを今考えています。

梅 本：ありがとうございます。蓑田さん。

蓑 田：僕がすごく感じたのは、公立教育とかオルタナティブスクールいろんなところに行ってきた、やっぱり教育っていうのに答えは無いんじゃないかなっていうふうに思ったんですね。よく教育に答えを求めようとする人がたまにいて、この教育だったらすごいんじゃないかとか、例えば、サドベリー教育だったら自由な環境だから、のびのびと個性が育つとか。でも、かといったらそんなこともないです。サドベリー教育に合っている人も合っていない人もいるし、そういう意味で本当に選択できる社会っていうのが実現できたらいいなっていうふうに思っています。

最後に一言、僕は大学受験、どの大学に入ろうかなというのに今すごく悩んでるところで、まちづくりとか地域活性について学べる大学に入りたいなというふうに思っていて、そういうことの勉強とかをやっていきたいなと思っています。以上です。

梅 本：ありがとうございます。大学の問題は、自分が今大学生なので、今のお話だけじゃなくて、この前の打ち合わせという感じでいろいろお話しはさせてもらったんですけども、いろんなこと勉強したいって言われる中、自分が出ている大学の授業の中にいる、いろんな人はどんな感じかなってことを考えたときに、蓑田さんがどういう選択をされるかっていうのが、すごく思い浮かんで一言返したんですが、ありがとうございました。

では、残り 20 分くらいあるんですけども、ぜひ会場の方から何かご質問だったりとかあれば、していただきたいなと思ったんですけども、何かある方いらっしゃいますか？

質問者：お話ししていただいてありがとうございます。他に質問されたい方もいるかもしれないんですけども、ちょっと欲張って質問しちゃうんですけど。

それぞれの方が、教育って言葉をたびたび使われるんですけど、どういう意味で使っているのかなというのが聞きたくて、聞きました。

東京サドベリーの方なんかは、サドベリースクールも教育って言い方もされていたんですけども、僕の頭の中でイメージする教育だったり、これ教えたほうがいいからって、それを教えるみたいなのが、一つ教育としてイメージしやすいかなってあるので、もっと広い意味で使われてると思うんですけど、どういう意味で使われてるのかなっていうのは、各々の方に、何かあったら聞きたいっていうのはあります。よろしくお願いします。

梅 本：どうですか？ みなさんにお聞きしたいんですかね？

質問者：何か思いついた方に…。

梅 本：何かどなたか自分にとって教育ってこういうものみたいな…。

質問者：どういう意味があって使ってるのかなって。

松 浦：僕が最後に言ったことにつながるかなと思うんですけど、僕は教育って3つあるなって思ってるっていうお話をしたんですけれど。教育って基本的に全ての物事の根底にある、ベースの物だになっていうふうに思っていて。人って成長するわけで、その成長の過程、プロセスみたいな、プロセスに作用する要素みたいなのが、基本的に全部教育からっていうふうに僕は思っています。なので、その中でなら余計に学校教育なんてちっぽけなものだになっていうふうに思っています。

質問者：ありがとうございます。

梅 本：ありがとうございます。他のみなさんはありますか？

ラファエル：じゃあ、僕が。僕にとって、いつもインフォメーションが集まるのが大事だと思います。いつも、「ああ、もっと笑いたいなあ」という気持ちが大事だと思います。

梅 本：ありがとうございます。なんか教育って、サドベリーの考え方なのかもしれないんですけど、教授と教育を混同してる人がいるっていうような話はよくありますよね。学ぶ側と教える側がいて、学ぶ側の意志に関わらず、その教育者側が教えたいと思うことを教える。それが教授でしたっけ？

私の勝手な理解なんですけど、教授するっていう、教えて授けるっていうやつですね。教授と教育を混同して、教育っていうのはもう一個ある、その人が本来持っている力を引き出すような意味で、教育というものはあるもので。エデュケーションだとそういう意味で…。

蓑 田：学校っていうのは、一つでしかない。教育っていう中で学校っていうのは一つの存在で、他にも生きているいろんなところの教育ってあると思うんですよね。そういう意味で使っていましたね。

梅 本：ありがとうございます。あと何かありますか？

質問者：大阪でソフトウェアの開発に従事している者です。お聞きしたいこといっぱいあるんですけど、あんまりいっぱい喋ってしまうと長くなりそうなので、松浦さんと蓑田さんにすごい個人的なことで、2、3、お聞きしたいことがあるので教えてください。

松浦さんが先程おっしゃっていた言葉の中で、社会に出るときの不安っていうのを、周りの方が多数抱えているというようなことをおっしゃってたんですけど、社会に出るってい

うのが、具体的にはどういった行為で、不安っていうものが何に引っかかっている、対象が何かっていうのが、具体的に何かあればそれをちょっと聞かせてもらってもいいでしょうか？

松 浦：社会に出る不安、社会に出る行為がどういうことかっていうと、そこに定義を持ってくるのは難しいんですけど、僕は基本的に人はみんな社会の構成員だと思ってるので。ただ、その学校っていう環境に対比して社会って考えたときに、学校を卒業するってことは、社会に出るっていう行為かなって思います。

社会に出る不安っていうよりは、シュタイナー学校、どっちかっていうとめっちゃくちゃ褒められるんで、根拠のない自信みたいなのがめっちゃ付くんですね。これシュタイナー学校の卒業生あるあるなんですけど、俺たち根拠のない自信ばかりだあって。その自信って多分今後生きていく上で、絶対支えにはなるなっていうふうに思って。ただ、シュタイナー学校以外の環境を、あまりにも漠然としてしか捉えられていないっていうことが、不安の根底にはあるのかなっていうふうに思っていて。ほかの教育でももしかしたらそうなのかもしれないですけど、結局、高校まで狭い世界の中で生きてこざるを得ないというか、自分で外に飛び出せる人は飛び出せるんですけど、飛び出さずに小さい世界の中で生きていく人が多いので、外の世界のリアルみたいなものに対する漠然とした不安を最後には抱えてるっていうことが不安の根底にあって。でも、じゃあ実際に社会に出たときに、その不安が的中するかっていうと、別にそういうわけではないかなっていうふうに思います。

質問者：例えば極端にいうと、どっかの職場に勤めたとして、大多数の人がいわゆる一条校を卒業して、その職場に入ってくるので、その中で一条校での経験みたいなことをベースに、会話とかをしてったら、それについていけるのかなとか、なんかそういったものに不安を覚える、すごいミクロな話で申し訳ないですけど、具体的にいうとそんな感じの不安っていうふうに捉えていいですか？

松 浦：そうですね。そうだと思います。そのミクロの部分すらあんまり見えないというか、なんとなくのイメージでしかないから、不安っていうことだと思います。

質問者：分かりました。ありがとうございます。

それから、蓑田さんにお聞きしたいんですけど、高校には行ってないっていうのは、高校にはそもそも在籍してないっていうことでいいですか？ それとも在籍してるけど行ってないっていうことでいいですか？ 大学に行くつもりってところなんですけど、18歳で行きたいっていうふうに今お考えだと聞いてますけど、18歳にこだわる理由っていうのが、何かあればそれを教えていただけますか？

蓑 田：僕は高校には在籍してませんし、実際に籍も置いてないし、行ってないっていうか、高校生って表現はちょっと正しくなかったかな。

質問者：この資料中の高校一年生っていうのは、あくまで16歳だから、高校一年生ってことでいいですか？

蓑 田：そうですね。あと18歳にならないと大学っていうのは入れないので、今の法律だと高卒資格が取れていても、18歳までは大学に入れられないですよ。

質問者：例えばなんですけど、今何かお金貰って働いてるっていうような状況なんですかね？

蓑 田：そういう訳じゃないですね。

質問者：だとすれば、先にすでにお金貰って働いて、何か気付いたときに、特定の物を深掘したいってなったときに、大学って行く選択肢もあるのかなというふうに思えたので、18歳より先でいいのではないかというふうに思っていて、ちょっと聞いてみたんですけど。

蓑 田：ああ、そういうことですか。もちろんそれも考えましたし、でも、今やりたいことは大学で学びたいなっていう思いがあったので、18歳まで自分の好きなことやって学んで、入りたいなっていうふうに今は思っています。まあ、これから変わるかもしれないんですけど。

質問者：分かりました。ありがとうございます。

質問者：川崎市から来ています。ラファエルさんに聞きたいんですけども、私の子どもも川崎で育っていて、外国にルーツのある方が増えていて、一緒に学んでいくってことも、これから必ず大事になって行く、今もうなっているんですけども。言葉の問題で公立学校で一人ぼっちになってっていう話がありましたけど、例えば、その言葉の問題の前に、学校の外で好きなことを一緒にやるプログラムとか、そういう場があったらよかったっておっしゃっていて。例えば、一番最初に言葉がいらなくて、一緒に音楽をやったり、一緒にサッカーをやったりとかいう時間がたっぷりあれば、言葉が分からなくても、公立の学校でみんなと一緒に楽しく過ごせたんじゃないかっていう、そういうことなんですか？

ラファエル：そうですね。言葉が合わなくても好きなことでみんな一緒に遊べるということ、そんなことが大事だと思いますね。

質問者：言葉の問題っていうのもあると思ったんですけども、言葉以上にそういう部分ももっとたくさんあったらいいなっていうことですかね。

ラファエル：そういうことですね。僕が感じたのは、日本人はそんなにコミュニケーションするのはあんまりしないってことですね。ブラジル人と比べたら結構違うんですよね。そう感じます。

質問者：ありがとうございました。

梅 本：コミュニケーションしないというのは学校内でってことですか？

ラファエル：学校以外にも。

梅 本：ありがとうございました。すいません乱入しました。じゃあ向こうのほうの…。

質問者：松浦さんに聞きたいんですが、自分でこういうことはやってみたいっていうのはありますか？ 企業でやってみたいとか、あとは民泊の仕事やってみたいとかそういうのありますか？

松 浦：僕はあんまり普通に就職して働くみたいなイメージがずっとできなくて。もうちょっとクリエイティブに自分で仕事を作っていきたいなと思ったのも、鳥取に行った理由の一つなんです。クリエイティブな仕事をしていくっていう上で、東京にはあんまり自分が入りこむ余地がないというか、もう人がわんさかいるんで、田舎なら自分が入りこむ余地があるなっていうふうに思って鳥取に行って、実際に民泊を仕事にしつつあるって感じですね。

民泊をやりたかったというよりは、例えば空き家がいっぱいあるとか、土地がいっぱいあるとか、自分たちが使える、入りこむ余地がたくさんあるなっていうふうに思っているんで、民泊は一つの手段でしかないんですけど、そういう形で田舎で自分で仕事を作っていきたいなと。あんまり枠にとらわれず、分野にとらわれずに仕事を作っていきたいなところを思っています。

梅 本：ありがとうございました。あと二人ぐらいいけますかね。

質問者：兵庫県から来ました。フリースクールのスタッフをしています。どなたでも結構なんですけれども、私どものフリースクールではみなさんとはちょっと違うというか、学校に行かないということで、学びに追いかけてるっていうことが、どちらかといったら多いかなと思うんですけども。みなさんのお話を聞いていると、学びを追いかけてるというか、学校に行かないことで、こういうことを学びたいとか、こういう時間をフルに使いたいみたいな、能動的な学ぶ姿勢みたいなものを感じたんですけども、そのお立場からというか、例えば不登校してる子どもたちに、何かアドバイスというか、エールみたいなものを一言、二言いただけたら、代わりに伝えたいなと思うんですけども、よろしいでしょうか？

梅 本：誰かどうですか？ 不登校関係ですからフリースクール…遠藤さんどうですか？

遠 藤：答えになるかどうか分からないんですけど、学校に行ったほうが最終的にはお金は稼げると思うんですよね。評価はされやすいと思うので、自分は、前澤さんも多分そうだと思うんですけど、中卒というふうにはしか捉えられてないので、多分給料はあまり、一般的な人から比べたら少ないと思うんです。そういうところが心配だなってということはあるんですけど、それ以外に関しては、別に特に心配もなく生きていけると思っています。

梅 本：前澤さんはどうですか？

前 澤：僕も勉強が嫌いだったので、全然やらなかったんで。でも、追いかけられるのは辛いですから、やりたくないことはやらないほうがいいんじゃないかなと思います(笑)。なんとか今は一応お金は僕も稼げてはいるので、あんま心配せずにやりたいことをやるのがいいのかなと、それが大事かなと思います。

質問者：ありがとうございました。

梅 本：じゃあ、ラスト一名ぐらいなんですけど、右奥の方がずっと手をあげられてたと思うので、お願いします。

質問者：千葉県浦安市から来ました。先程、松浦さんが、教育には家庭も学校と地域もあるけれども、家庭も一人一人の人生というか、大事な時間を過ごす場所だと思うんですけども。お父さんとかお母さん、もしくはお母さんとお父さんはいらっしやらない方は保護者の方で結構ですので、みなさんのお母さん、お父さん、ないしは保護者の方って、こんな人だよみたいなことを、プライベートなこともあると思うんですけども、シェアしていただくと、見えてくるものがあるかなと思ったので、できればみなさん一人一人お伺いできればと思います。お願いします。

ラファエル：僕はちょっと違うポイントがあります。2年前にうちのお母さんが亡くなったんです。ですから、お母さんのサポートが足りなかったんですよね。それが結構辛かったんですね。今後ろにいらっしやるお父さんが結構サポートしてくれましたけど。お母さんのほうは辛かったですね。

梅 本：ありがとうございます。

前 澤：うちはやっぱり学校に行かなかったんで、最初はやっぱり父親は引っ張ってでも連れていけみたいな感じだったんですけど、母親の方が割と理解があって、あんまり口うるさく…ま

あ、最初は言っていましたけど、すぐに言わなくなったので、わりと放任主義というか、心の中では心配はしてたと思うんですけど、あんまり学校に行かないことにたいしては何も言わなかったし。父親も本当はすごい言いたかったと思うんですけど、半年に一回ポロっと「どうすんだ？」みたいに言うぐらいで、基本的に温かく見守ってくれてたので。自分にとっては家庭というのが、比較的すごく居心地のいい場所だったので、それは自分が生きていく上ですごく安心できるベースが一つあったっていうのは、自分にとってはありがたかったと思って、それは両親に感謝しているところですね。

中には家に居場所がないっていう子どももいると思うので、自分にとっては少し落ち着ける、休める場所があった、それが自分の場合は家庭だったっていうのは大きいかなと思っていますね。

梅 本：全員とおっしゃられたんですけど、時間があれなんで、もう一人ぐらい…。

蓑 田：僕の両親はすごく自由にさせてくれて。東京コミュニティスクールを紹介してくれたのも、サドベリースクールを紹介してくれたのも両親だったので、すごく感謝をしています。それで、サドベリーに入ったときに、一年間ずっとゲームをやっていた期間に、よく何もいわずに見てくれたなって。自分が親だったら絶対言ってると思う。「少しは勉強やったらどうかな」みたいな。それをずっと見ていて、見守ってくれたっていうのはすごく感謝をしています。

梅 本：ありがとうございます。ちょっとお時間が過ぎてしまったんですけども、こんな感じで、このシンポジウムを終わりにさせていただきたいと思います。
まとめられないんですけど、ホームエデュケーションはどこに行ってもいいのかわからなかったんで、行かなかったんですけど、りんごの木もシュタイナー学校もコミュニティスクールもブラジル学校も、全部見学に行かせていただいたんですけども、全然違うので、一日で全然質問できないなっていうふうなことが、まず全体にあって。そんな中、いろんな質問を投げるっていうような感じになってしまって、たくさん質問が残っているところ申し訳ないんですけども、懇親会のほうにもいらっしゃる方がいらっしゃるので、このまま何かあったら話をさせていただければなと思います。本日はありがとうございました。